

十一月の階段

牧師 山本 護

世界中のオーケストラが今なお演奏している武満徹(1930～96)作曲の「ノヴェンバー・ステップス」。現代音楽史上重要な本作品は 1967 年 11 月にニューヨークで初演されました。日本語で言えば「十一月の階段」。邦楽では楽曲構成を「段」と言いますが、この曲の構成は「十一段」で長管尺八と琵琶とオーケストラが切れ目なく演奏される。伝統的な邦楽は一端様式が確立されると、「同質の領土」を守るかのように混じり合うことを嫌いますが、尺八と琵琶もすぐ近くにありながら共に演奏することは皆無でした。

ノヴェンバー・ステップスについて作曲者の武満はこう語っています。「邦楽器とオーケストラが調和ではなく異質の領土となる」。また「西洋の音楽は水平歩行だが尺八の音は垂直に〔樹〕のように起る」とも。

私の神学生時代の風潮は垂直的な権威を嫌悪し、水平なものこそ自由だと思っていた。聖書研究にもそれが影響していて、若い牧師や神学生は史的イエスについて口角泡を飛ばし論争していました。ところが現代では膨大な情報が水平かつ相互に交換され、何かと水平にさせようとする抑圧が働いている。むしろ樹のように天に向かう垂直な「孤独」が欠けている気がします。

「神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである(ヨハネ 6:33)」。垂直的な孤独に「命のパン」が降り、それが水平的に広がっていく。武満のノヴェンバー・ステップスも、未知の響きが長管尺八と琵琶によって垂直的に啓示され、オーケストラがそれに感応して水平的に歩行していく。そのような「つくり」としてイメージしていると、11 月の風景がこの身に滲んで来ます。

教会の庭にはカツラの樹が二本ある。地中の命を集めて天に向かって祈っているとも言えるし、天からの命を受け秋の葉を地に敷きつめている、とも言えます。針葉樹のように整然とではなく、腕を伸ばして祈る私たちのように、思いおもいに地と天が垂直に結ばれています。

天と地。この「異質の領土(武満徹)」は、キリストなる神の降下によって、分かちがたく結ばれている。黄色く輝くカツラの葉。特有の甘い香りを発しながら、風に揺れて私たちに手をふっています。やがて死に、朽ちて地に落ちるようでいて、聖霊なる風に巻き上げられて天に昇っていくようにも見えました。Ω

